

医療用医薬品市場調査(4)

高脂血症、糖尿病治療剤などの国内市場を調査

2017年の糖尿病治療剤市場は3,770億円を予測(08年比47.5%増)
 高齢化に伴い糖尿病患者数が増加、重症例の増加や罹患期間の長期化も

総合マーケティングビジネスの株式会社富士経済(東京都中央区日本橋小伝馬町 社長 阿部 界 03-3664-5811)は、2008年~2009年にかけて、国内の医療用医薬品市場を6分割し2年間で網羅する調査を行っている。今回はその第4回目として、高脂血症治療剤、代謝系疾患治療剤、解熱消炎鎮痛剤、血液関連製剤、漢方製剤の市場を調査した。その結果を報告書「2009 医療用医薬品データブック No.4」にまとめた。

この報告書では、薬剤分類に応じた疾患概要、患者動向、治療薬の市場概況と開発状況を調査・分析し、今後の市場を予測している。

<調査結果の概要>

1. 高脂血症治療剤

2008年	2009年見込	2017年予測	2008年比
3,404億円	3,659億円	4,085億円	120.0%

高脂血症とは、血液中の総コレステロールや中性脂肪が常に正常値より高い状態を指す。必ずしも症状に直接つながるものではないが、動脈硬化をもたらし、虚血性心疾患(狭心症、心筋梗塞)脳血管障害(脳梗塞、脳出血等)の原因となる。また、高脂血症や肥満、高血圧などの複数の要因が重なってメタボリックシンドローム(以下「メタボ」)が定義されている。

メタボの概念が定着してきたことや、高脂血症に対する認知度の向上によって、治療患者数は増加傾向にある。さらに2008年4月より、医療保険者に40~74歳の被保険者・被扶養者を対象とした特定健康診査・特定保健指導が義務付けられたことで、潜在患者の掘り起こしが進んでいる。治療患者数の増加が市場へ与える影響は大きく、2008年は前年比3.0%増の3,404億円となった。

市場は、LDLコレステロール低下薬のHMG-COA還元酵素阻害剤が70%以上を占めている。中でも各企業の注力度が高い「リピトル」(アステラス製薬)、「リバロ」(興和創薬、第一三共)、「クレストール」(アストラゼネカ、塩野義製薬)が伸ばしており、市場拡大に寄与している。

また、2007年発売の「ゼチーア」(バイエル薬品、シェリング・プラウ)は、日本では18年ぶりに承認された新しい作用メカニズムを持つ薬剤であり、重点的にプロモーションを行うことで処方や効果の知識向上を図っている。単独療法とHMG-COA還元酵素阻害剤との併用療法で処方が増えている。

2009年は前年比7.5%増の3,659億円が見込まれ、2013年には4,000億円を超えると予測される。しかし、メタボ予防意識の高まりで薬物治療にまでは至らず食事療法や運動療法で留まるケースも増えていることから、薬剤を処方される患者の伸びは鈍化し、市場の成長率も低下していくと考えられる。

2. 代謝系疾患治療剤

2008年	2009年見込	2017年予測	2008年比
3,052億円	3,222億円	4,351億円	142.6%

糖尿病治療剤、糖尿病合併症治療剤、痛風・尿酸血症治療剤、抗肥満剤を対象とした。糖尿病を中心に同領域が対象とする生活習慣病患者の増加が市場の拡大に繋がっている。市場の80%以上を占める糖尿病治療剤の増加が牽引し、2008年は前年比4.6%増の3,052億円となった。

2009年は前年比5.6%増の3,222億円、その後も成長を続け2013年には4,000億円を超えると

予測される。

【主な市場（疾患分類）の動向】

（１）糖尿病治療剤

2008年	2009年見込	2017年予測	2008年比
2,556億円	2,725億円	3,770億円	147.5%

高齢化に伴う糖尿病患者数の増加だけでなく、重症例の増加や罹患期間の長期化により処方が増加しているほか、経口剤では2006年に「セイブル」（三和化学研究所 - 大日本住友製薬）、インスリン製剤では2007年に「レベミル」（ノボ ノルディスク ファーマ）など、共に新製品の発売が活発なことから、市場の拡大が続いている。2008年は前年比6.4%増の2,556億円となった。また、2008年の市場構成比は経口剤が70.4%、インスリン製剤が29.6%となった。

経口剤は、最も市場規模の大きい グルコシダーゼ阻害剤がジェネリック医薬品の影響や他の経口剤との競争激化の影響から実績を減らしている一方、国内唯一のチアゾリジン誘導体である「アクトス」（武田薬品工業）は2桁増を続けている。「アクトス」は単独療法のほか、他剤との併用療法の適応追加により治療の幅が広がっており、更なる拡大が見込まれる。

インスリン製剤は、トップシェアのノボ ノルディスク ファーマを中心として、日本イーライリリー、サノフィ・アベンティス共に注力が高く、実績を伸ばしている。また、従来型の遺伝子組み換え型製剤からインスリンアナログ製剤への移行が進んでおり、2009年には両者の市場規模が逆転すると見込まれる。

2009年の市場は前年比6.6%増の2,725億円と見込まれる。2008年に実績を減らした グルコシダーゼ阻害剤は、「セイブル」が好調なことから2009年は増加に転じると見られる。2017年には2008年比47.5%増の3,770億円まで市場が拡大すると予測される。

（２）痛風・尿酸血症治療剤

2008年	2009年見込	2017年予測	2008年比
238億円	239億円	290億円	121.8%

新薬が40年近くも登場していないことから、薬価の低い古くからの薬剤が処方の中心となっている。2008年は前年比1.7%減の238億円、2009年は0.4%増の239億円が見込まれる。

他の生活習慣病や代謝系疾患と同様、高齢化に加え食生活の欧米化などにより、尿酸血症の患者数は増加傾向にある。尿酸血症の患者が必ず痛風になるということではないが、代謝異常には変わりがないため早期治療が重要視され始めている。また、最近では参入企業がメタボと尿酸血症の関係性をアピールするなど、潜在患者の掘り起しが進んでいる。

このような流れを受けて市場は緩やかに拡大し、2017年には2008年比21.8%増の290億円が予測される。

3. 解熱消炎鎮痛剤

2008年	2009年見込	2017年予測	2008年比
1,250億円	1,262億円	1,254億円	100.3%

非ステロイド系とステロイド系の消炎鎮痛剤、解熱鎮痛剤のうち、経口剤、注射剤、坐剤等を対象とした。外用剤は対象外とした。非ステロイド性消炎鎮痛剤（NSAIDs）の「セレコックス」（アステラス製薬）が発売された2007年以降、市場は拡大しており、2008年は前年比2.0%増の1,250億円となった。2009年は前年比1.0%増の1,262億円が見込まれる。しかし、2009年をピークに微減推移となり、2017年は2008年比0.3%増の1,254億円が予測される。

【主な市場（疾患分類）の動向】

（１）NSAIDs・解熱鎮痛剤

2008年	2009年見込	2017年予測	2008年比
1,063億円	1,075億円	1,081億円	101.7%

NSAIDsは、鎮痛・解熱・抗凝固などの作用から様々な疾患に対して使われており、使用頻度の高い薬剤のひとつである。2008年の市場は前年比2.9%増の1,063億円となった。主に軽度～中程度の疾患に処方されるため、患者数の増減が市場に与える影響は限定的である。そのため、市場規模は大きく変わることなく推移すると見られる。2009年は前年比1.1%増の1,075億円、2017年は2008年比1.7%増の1,081億円が予測される。

このような市場環境の中、前述の「セレコックス」を中心に、胃腸障害などの副作用が少ないと言われるシクロオキシゲナーゼ-2(COX-2)選択的阻害薬が大きく実績を伸ばしている。今後もCOX-2選択的阻害薬への切り替えが進み、そのシェアを広げていくと考えられる。

4. 血液関連製剤

2008年	2009年見込	2017年予測	08年比
3,206億円	3,201億円	3,343億円	104.3%

血液製剤・止血剤と貧血治療剤を対象とした。市場は縮小推移が続いており、2008年は前年比4.8%減の3,206億円、2009年は前年比0.2%減の3,201億円が見込まれる。糖尿病患者の増加と高齢化に伴い透析患者数は引き続き増加が予想されることから貧血治療剤が回復へ転じ、2017年は2008年比4.3%増の3,343億円が予測される。

5. 漢方製剤

2008年	2009年見込	2017年予測	08年比
865億円	879億円	1,025億円	118.5%

漢方医学のカリキュラムが全大学医学部に導入されたことや、大学病院内の漢方外来設置により、市場は拡大を続けており、2008年は前年比1.6%増の865億円、2009年も前年比1.6%増の879億円が見込まれる。漢方製剤の処方が今後さらに進むと考えられ、2017年の市場規模は1,000億円超が予測される。

以上

<調査対象>

疾患領域	疾患分類
高脂血症治療剤	高脂血症治療剤
代謝系疾患治療剤	糖尿病治療剤、糖尿病合併症治療剤、痛風・高尿酸血症治療剤、抗肥満剤
解熱消炎鎮痛剤(外用剤を除く)	NSAIDs・解熱鎮痛剤、ステロイド系消炎鎮痛剤
血液関連製剤	貧血治療剤、血液製剤・止血剤
漢方製剤	漢方製剤

<調査方法>

富士経済専門調査員による調査対象企業及び関連企業・団体等へのヒアリング調査及び関連文献を併用

<調査期間>

2008年12月～2009年3月

資料タイトル:「2009 医療用医薬品データブック No.4」

体 裁 : A4判 259頁

価 格 : 160,000円(税込み168,000円)

調査・編集 : 富士経済 東京マーケティング本部 第二事業部 メディカルグループ

TEL:03-3664-5821 FAX:03-3661-9514

発 行 所 : 株式会社 富士経済

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2-5 F・Kビル

TEL03-3664-5811 (代) FAX 03-3661-9514 e-mail:info@fuji-keizai.co.jp

この情報はホームページでもご覧いただけます。

URL : <http://www.group.fuji-keizai.co.jp/> <https://www.fuji-keizai.co.jp/>